

古文書調査と自然現象

平成 30 年(2018)3 月 12 日

第 6 回 CODH セミナー 歴史ビッグデータ

～過去の記録の統合解析に向けた古文書データ化の挑戦～

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

文化遺産部 歴史研究室長 吉川 聡

はじめに

古文書調査者から見て

1. 古文書利用の留意点
2. 前近代社会における自然現象と人間との関わり

古文書：ここでは、狭義の文書(差出者が充所に出すもの)・典籍 を総称

奈良文化財研究所 歴史研究室：奈良を中心とした古文書調査

奈良文化財研究所(略称、奈文研)の略歴

昭和 24 年(1949)、法隆寺の火災・金堂壁画の焼損

昭和 27 年(1952)、奈良文化財研究所の創立 美術工芸研究室・建造物研究室・歴史研究室

昭和 38 年(1963)、平城宮跡発掘調査部を設置 → 埋蔵文化財の分野が充実

平成 13 年(2001)、独立行政法人となる。

奈文研による古文書調査：文化財総合調査の一部門としての系譜。

箱ごとに全点をチェック→番号を決定→ラベルを貼付→調書作成→写真撮影→目録原稿の作成・校正→目録刊行

- ・特定のテーマを調べるために調査するわけではない。未整理の古文書を悉皆的に調査する。
- ・文化財として保存できるようにする。また、史料として利用可能にする、という作業。
- ・調査対象のほとんどは、寺社・個人が所蔵する古文書。

歴史ビッグデータ(?)

古文書が利用可能になった後に、翻刻の公表・データベースへの登録等→歴史ビッグデータ(?)

1. 古文書利用の留意点

古文書がいかにして、伝存し、認識され、利用できる状態になるのか。

文書の作成 → 組織・個人により長期間保管される。→ 古文書となる。

○文書は、記録する必要があったことを記録する。必要が無ければ記録しない。

○古文書は、保管する必要があったから残った。必要が無ければ残らない。

文書作成者・古文書所蔵者の影響

①散逸する可能性 (保管する必要性が薄れた場合)

文化財指定されていないものがほとんど。その場合、保存は所蔵者に委ねられる。

自治体史等で紹介された史料でも、その後行方不明になり、検証不能になる事例が多くある。

『福井県史』編纂資料の例：福井新聞 2018年1月8日「福井県内の古文書がネットで散逸

バラバラにされオークションに」 <http://www.fukuishimbun.co.jp/articles/-/279480>

○目録の整備・写真撮影など、散逸しないようにする努力・万一散逸しても検証可能にしておく努力が必要。

②所蔵者・社会状況等に配慮する必要（古文書が現在も意味を持っている場合）

○調査・公表の過程では、所蔵者の理解を得る必要がある。何百年もの間保存してきたことに対し敬意を忘れてはならない。この点、所蔵者が家の誇りとしているような場合、他者がそれと違った見解を述べることに拒否感を抱くこともあり得る。

○部落差別・家柄等々、現在も社会の中で影響を持つ事実が記されている可能性。

☆所蔵者の理解を得て、また、周囲の状況を充分踏まえた上で利用すべきもの。

☆古文書：伝世してきた人たちの思いがこもっている。その思いを理解する必要。また、先行研究において、そのような思いを踏まえた微妙な表現をしている可能性も理解する必要。

③史料批判の必要性（関係者の意図が強く出過ぎている場合）

文書作成者が事実をまげて記す可能性・偽文書の可能性

例：江戸時代後期、椿井政隆(1770-1837)による偽文書作成（椿井文書）

興福寺所蔵「興福寺官務牒疏」等 藤本 2009(初出 1988)・馬部 2005・馬部 2017

○目録・史料集・自治体史等に採録 → ビッグデータの一部に → 史料批判を忘れる

☆古文書の利用は、史料批判ができる研究者が、自己責任で行うべきもの。

☆無機的なビッグデータとして扱うことの利便性と、その危険性・落とし穴を認識する必要。

2. 自然現象と人間の関わり 古文書調査の中で感じたこと

興福寺の論義草の調査から

論義：仏教の教えについて、僧侶が議論すること。その台本が論義草。

高度に哲学的な内容。仏教に関する深い理解があってはじめて理解できる。

事例：興福寺第 80 函 144 号（吉川 2013・吉川 2009 参照。写真・読み下し文は吉川 2013 に掲載）

江戸時代の延宝 6 年(1678)の書写(g 奥書)。

ただし、内容はさらに前代のもの。前半と後半に分かれる。

前半：顕範の作文。(外題下：「顕範」、内題下：「顕範草」)…顕範：鎌倉時代の興福寺僧。

後半：作文者不明。(本文の末尾：「以上草主不知之」)

ただし、奥書の前に、本奥書が存在(a～f)。永承元年(1504)に書写したとある。

○鎌倉時代などに作文された論義草を、室町時代の永正元年に写し、さらに江戸時代に写した。

本奥書の大意

a：永正元年(1504)に、この坊の毎月の講義用に書いた。

b：その前の年の文亀 3 年(1503)、5 月 20 日に雨が降って以後(5 月 20 日は現在のグレゴリオ暦では 6 月 21 日)、8 月 1 日(現在の 9 月 1 日)まで日照りが続いた。雨を祈ったが全く雨が降らず、日照りが前例のないほどになった。

c：8 月(現在の暦で 9 月 1 日～)から馬借が立ち上がって、四方から奈良を攻撃した(つまり、土一揆が起きた)。路次での悪事は言葉にできないほどである。具体的には、田を刈り取ってし

まう。とりわけ、福寺に馬借が乱入し、堂社をみな焼いてしまった。同じく、眉間寺・天満宮、そのほかの墓場などを焼き払い回った。世の末だとは言っても、このようなことが巡り合わせて眼前する不運は、言語道断で、嘆いてあまりある。

*馬借（運送業者）が郊外から都市に侵入するのが、土一揆の基本的な姿。京都でも奈良でも。

*福寺：南京終町5丁目にあった寺院。この頃以後、史料に見えなくなる。

*眉間寺：法蓮町の聖武天皇陵にあった寺院。明治維新時の廃仏毀釈により廃寺になる。

*天満宮：高畑町の天神社（天満神社）のことと思われる。

d：さらに冬は厳寒で、久しく無かったほどだ。春の3月（現在の3月27日～）も寒い風が吹き、2月中旬に大雪が降った（現在の3月7日～16日）。これも普通のことではない。しかし去年から日照りのため、売買はみな物価が高かった。そうしているうちに、土民・百姓たちは、飢え死にする者が重なった。みんなこぞって言うことには、「般若寺・眉間寺・白毫寺の死人は足の踏み場もないほどだ」と。その外、郊外の道ばたには餓死者が数知れずいた。そのときの噂では、井戸堂の一つの里で飢え死にが56人。長原で94人。丹波で62人。その外の里では数をかぞえることもできないくらいだ。行き交う乞食たちも数多い。

*般若寺：般若寺町に現存。真言律宗。

*眉間寺：前出

*白毫寺：白毫寺町。真言律宗。

} 奈良の町外れの、死者を埋葬する寺院

*井戸堂：天理市東井戸堂町・西井戸堂町（図6）

*長原：天理市永原町

*丹波：天理市丹波市町

e：次にまた、4月中旬頃から6月頃まで、流行病がはやった。家内で死者が2・3・4・5人と、どの家にもある。行に入る鐘の音が昼も夜もいつも止まない。涙も忘れ、火葬もできなくなってしまった。葬送の念仏は、家の中でいつも唱えている。本当に、哀れみの思いを催し、自らの懺悔の気持ちを増すこの頃である。

f：考えてみると、天下こぞってみな、一向宗になっている。すべてのおこないが邪法を増している。尊い神が警告を発しているからだろうか。

本奥書から分かること

・文亀3年(1503)～永正元年(1504)の飢饉

全国的には有名だが、奈良に関しては、従来はあまり史料がなかった。

「二条寺主家記抜萃」文亀4年条：「天下飢饉。餓死多し。和州は特に多く死す」

この史料から、その悲惨な実態が初めて明確になった。

日照り→不作→冬に物価が騰貴→冬が厳寒で、飢えと寒さで餓死者が多く出た→弱って抵抗力が落ちた→春に疫病が流行して死者が多数出た

・土一揆：命の危機に直面した人々が、食料を求めて起こしたギリギリの行動と思われる。

・一向宗の浸透(f)：一向一揆は、加賀では文明6年(1474)から。奈良では天文元年(1532)に発生。ただし近年は、一向一揆も土一揆も似たようなものだという説が唱えられている(神田2004など)。

・年輪年代学との関係

ヒノキの暦年標準パターングラフ(奈文研1990)：前後数十年で一番生長が悪いのは1504年(飢饉の2年目)。近年の研究では、ヒノキの生長は春先の気温と深い関係があるとのこと。そのような研究成果と対応するか。

☆ここでは、生活・経済、さらには政治までも、規定しているのは自然現象である。人間ではどうしようもない自然現象によって、社会が支配されている。その中で人々は神仏にすがっている。

付録. 古文書調査の周辺から

古文書を入れる箱の年輪 奈文研 2004 参照

石山寺の経箱・興福寺の経箱：杉の木箱

基本的にはすべて柾目の板。また、年輪の間隔が狭く、良い材を用いている。

一部、板目の板もあるが、それらは後世の修理材。

柾目板は年輪年代法で測定可能。石山寺は平安時代院政期、興福寺は鎌倉時代。

○鎌倉時代頃までは、目の詰まった良材を、贅沢に使って箱を作ることがあった。

→室町時代以降、森林資源が枯渇していった、ということか？ さらなる検討が必要（吉川 2017）

5. おわりに

古文書：残そうと思ったものが残る。そのことの怖さ。

しかしその中でも、思わぬところに思わぬ発見。

→自然現象：現代と前近代における、人と自然との関係性の相違。何気ない機会に感じることもある。

主要参考文献

神田千里 2004『土一揆の時代』吉川弘文館

奈良国立文化財研究所（奈文研）1990『年輪に歴史を読む—日本における古年輪学の確立—』（執筆 光谷拓実等）

奈良文化財研究所埋蔵文化財センター（奈文研）2004『埋蔵文化財ニュース』116号、年輪年代法と最新画像機器（執筆 光谷拓実等）

馬部隆弘 2005「偽文書からみる畿内国境地域史—「椿井文書」の分析を通して—」（『史敏』2005春号）

馬部隆弘 2017「偽文書「椿井文書」が受容される理由」（『近代日本の偽史言説』勉誠出版）

藤本孝一 2009（初出 1988）「近衛基通公墓と観音寺蔵絵図との関連について—『興福寺官務牒疏』の検討—」（『中世史科学叢論』思文閣出版）

吉川聡 2009「興福寺の論義草奥書にみえる歴史」『奈良文化財研究所紀要 2009』

吉川聡 2013「古寺社の古文書が語りだす歴史」『遺跡をさぐり、しらべ、いかす』クバプロ

吉川聡 2017「古文書のハコ」なぶんけんブログ <https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2017/06/20170626.html>